

隨泉寺寺報

平成 21 年 (2008 年) 3 月号 第 463 号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

春季彼岸会法要

講師 光源寺副住職 堀 靖史師

講題 『阿弥陀さまと私』

彼岸とは仏の世界、此岸とは私たちが四苦八苦する迷いの世界です。いうならば、彼岸は遠く、此岸はなれ親しんだ世界ですが、でも、「これでいいのだろうか」とふと考えることがあります。そんな時、仏の世界を知りたく思うことでしょうか。彼岸会には、ご先祖を敬って墓参に行かれることと思いますが、それと共にご自身の心のあり様を見直すことも大切です。



浄土真宗の詩人、故・木村無相さんの詩です。

【 たなの上で ネギが 大根が 人参が 自分
の出を待つように
ならんでいる。こんなおろかな わたしのために。】



私たちはいつも貪り(欲望) 怒り(憎しみ) 愚痴という「三毒」の世界をさまよっています。自分勝手な煩惱・欲望は尽きることがありません。ですが、貪りを「知足」に、怒りを「慈悲」に、愚痴を「感謝」に 仏様の智慧で気づかせていただきます。

3月の法座予定

- 3月 8日 …… 掃除 平原東 8:30 ~
- 3月 14日 昼席午後1時より …… 春季彼岸会法座
- 3月 14日 夜席午後7時より …… 出張法座 平原東(久保 久男)氏宅
- 3月 15日 朝席午前10時より …… 春季彼岸会法座 おとき
- 3月 15日 昼席午後1時より …… 春季彼岸会法座
- 3月 15日 昼席終了後より …… 佛婦役員会
- 4月 2日 午後4時より …… 門信徒会本部役員会 花見

☆ 喜び合えること

私が僧侶になってから早くも、40年近くになります。一つの疑問が、頭の片隅から消えませんでした。それは、『なぜ、僧侶になったのか』という自分への問いかけでした。

生まれたのが、たまたまお寺だったということ、また祖父がちょうど18歳の頃、これからの進路を考える頃に、亡くなったということも大きな要因でした。または周囲の期待に押されたのか・・・等々。



三人の娘が不思議なことに、次々と僧侶の資格を取ってくれました。それはとても嬉しいことでした。自分のやっていることを認めてくれたということですから。本堂で親子で一緒にお勤めをするときは、自分でもおかしいくらい喜びの心が湧き上がってきます。亡くなった前住職と5人で法要を勤めたときは、なんと幸せなんだろうと思いました。お勤めが終わって本堂の御門徒さんのところへ行ったら、子供たちの法衣姿に涙を流して喜んでくださり、手を合わせて深々と頭まで下げてくださいました。その瞬間、長年の疑問が一気に解けていきました。

『ああそうだ。これだったんだ。』そういえば...、私が中学生のときはじめて衣を着てお盆のおまいりに行ったとき、へたなお経を全身汗まみれで読んでいました。しばらくして涼しげな風がどこからか吹いてくる。辺りを見渡すと御門徒のおばあちゃんが、手にしているうちわで扇いでくれている。『しっかり勉強をして、いいお坊さんになってください』と。

そうでした。私は、はかり知れないご恩と、教えを、皆さんから授かっていたんだと、改めて気付かされました。こうした人たちの心に願われ、後押しされ、また励まされ僧侶となったのだと。



その人たちの喜びは私自身の喜びであったのです。

喜び合えることこそ、わたしのいのちもを生きている、と実感できるのではないのでしょうか。娘たちもいずれ解ってくれると信じています。

☆御礼

永代経懇志 金 参拾萬円 木建 照子殿 故 木建 石男様 特 永代経志として

☆御礼

門信徒会へ 金 百万円 鎌田 節子殿 故 鎌田不動様 香典返しとして

☆御礼

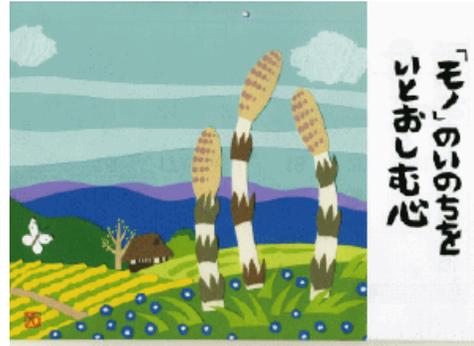
仏教婦人会へ 金 五十万円 鎌田 節子殿 故 鎌田不動様 香典返しとして

「モノ」のいのちをいとおしむ心

物の豊かさが、子どもの心を貧しくすることにならないように、どんなお心くばり手だてをしてくださっているでしょうか。

思い出すのは、私が小学校にお世話になっていたときのことです。ある朝、朝礼台の上で「おはようございます」の挨拶をすませると、私は、いきなり「痛いだらうか」と言いながら右腕の肘を曲げて見せました。

私の意図を汲みかねたのか、子どもたちはみんなキョトンとして無言で私を見ていました。そのとき、一年生の子が「痛いです」と叫んでくれました。「そう、痛いですね。ではこうしたら？」と言いながら、腕の関節に左手を添えて逆に曲げようとした。一年生の子が心配そうに「そんなことしたら痛いです。折れてしまいます」と叫んでくれました。



『そう、痛いね。折れてしまうね。でも、きのう、校長室の窓から、みんなが帰っていくのを見ていたら、雨あがりの運動場で、こうもり傘を急に振り廻して風を含ませ、傘を朝顔みたいに上向きに開かせ、傘の骨が「痛いよ」「痛いよ」といっているのが聞こえない子がいたよ。みんなの中には、傘や靴をいじめないばかりか、物のいのちを大事に使っている人が

たくさんいるのだが、そういう人は、明日、その宝物をもってきて見せてくれないかな』と頼んで朝礼台を降りました。

その翌日、みんなで一七〇人余りもの子が、次々に宝物を見せに来てくれるものですから、私は嬉しくなってしまう、先生方に頼んでその展覧会を開いてもらいました。

おじいさん・お父さん・ぼくと大事に使い伝えられてきたという硯。お父さんの子どもの時の弁当箱に、お母さんがマジックで花の絵を描き「これは何万円出しても買えない弁当箱よ」といわれ、弁当給食の日、自慢にして持ってくるという女の子の弁当箱。

お母さん・姉さん・私と使い伝えられてきたという下敷きは、破れたところにセロテープがはってありました。蓋に「さよなら・ありがとう」と書いた紙箱の蓋をとつてみると、綿を敷いた上に、一年のときから



の使えなくなった短い鉛筆が、ていねいに並べられていました。

六年のH君のランドセルには「一年のとき、ぼくにおともして入学したランドセル。二年の頃から、ベルトをちぎったりする人もあったのに。

三年・四年と、一年一年ランドセルが消えていったのに。そして、六年になったら、とうとうぼくだけになってしまったのに。だからぼくはちょっとはずかしいんだ。でもランドセルのマラソンで次々失格して行って、ぼくだけが走り続けていることがはずかしいことだろうかと考え直し、きょうもぼくはランドセルを背負ってきた。やっぱりちょっとはずかしいが、もうあと四か月で卒業。こんなところで失格させては申しわけない。ランドセルよがんばってくれ。ぼくもがんばる」という詩が添えられていました。

ほんとうに心あたたまる展覧会が生まれ、急に子どもたちが、ものを愛しんでくれるようになりました。



「今まで本当にありがとう」

母、井谷一枝は、家族の胸にたくさんの愛情をのこし、平成21年2月20日、満91歳の生涯をとじました。

34、5歳頃からは、花屋をしていた母。72歳まで何十年と花市場に、い、季節の花々を販売してまいりました。とても明るくて朗らかな母は、お客様からも慕われて、一生懸命働いていたものです。そんな母から、多くのことを教わりました。私達はこの母の子に生まれ育ててもらって本当に幸せだったと感謝の気持ちでいっぱいです。



現役を退いてからは、家でおばあちゃん業に専念して、孫やひ孫の成長をあたたかく見守ってくれておりました。

いつも、「私には、孫7人、ひ孫12人いるんだよ」と話していました。優しい優しい母の笑顔がまだ鮮やかに思い出され、悲しみが溢れてまいります。これからは、先に待つ父の元で、思い出話に花を咲かせながら、二人仲良く私達のことを見守っていて欲しいと願っております。

